

これからの眼鏡産地(1)

新素材と人材の開拓めざせ

世界に羽ばたく鯖江産の眼鏡枠。その素材は時代と共に変化し、製造方法も手作業から量産へ進みました。

初めは真鍮や銅などの金属を叩き伸ばして溝を彫る手法でしたが、戦時中にはセルロイドが登場し、歌手の東海林太郎が黒く丸いめがねをかけていたの思い出します。

戦後はセルと金属を経て、この15年ほどの間にチタンが主流を占めるようになりました。

チタンはもともと飛行機の材料で、軽くて丈夫で皮膚にもやさしく、日本のお家芸として伸びてきましたが、今では外国でも製造が可能となり新しい

素材の開拓が求められています。

眼鏡枠の元祖、増永五左衛門さんが大阪から眼鏡枠の製造を福井に導入してから約百年。農家の小屋に人々を集め技術を教え広めた功績は大きく、今改めて教育訓練を伝承する意義が問われています。

その創業の志を受け継いで、チタンのろう付けを成功にこぎ着けた職人気骨。トランクに見本を詰めてこつこつと内外市場を切り開いた人々の情熱。海外に拠点を築いたパイオニアたちの雄志。それらの熱い鯖江めがね魂が今日の産地を築いてきました。

この産地は、強力な枠メーカーのリードと、底辺から支える下請加工の力が一体となって発展しました。

下請けの生産高は、この10年で70億円から120億円へと増えています。

眼鏡産地の将来を築くために、何よりも重要なのは人の力です。

これからは最高の眼鏡づくりの人。素材から販売までを理解し企画できるゼネラリスト。デザイン、営業などの分野で世界レベルのプロ。こうした人材の育成と確保が重要な課題です。



産地のシンボル眼鏡会館